

平成 28 年度

福岡県移住者子弟留学報告書

2016 Exchange Students Program for
Descendants of Immigrants from Fukuoka Prefecture

C o m p l e t i o n R e p o r t

Fukuoka International Exchange Foundation

公益財団法人福岡県国際交流センター

目次

02

中村 クリスチアネ 小百合（ブラジル福岡県人会）

福岡教育大学教育学部

07

浅野 レナン ゆうじ（ブラジル福岡県人会）

九州大学大学院 経済学府

14

清水 愛実 サラ（ブラジル福岡県人会）

九州産業大学 芸術学部

21

池尻 直美 カレン（ブラジル福岡県人会）

九州大学大学院 薬学府

27

山崎 亜希（パラグアイ福岡県人会）

中村学園大学 栄養科学部 栄養科学科

32

松藤 福田 カルロス アウグスト（ペルー福岡クラブ）

九州造形短期大学 造形芸術学科

37

八田 生香（在ボリビア福岡県人会）

福岡医療専門学校 柔道整復科/鍼灸科



ブラジル福岡県人会

中村 クリスチアネ 小百合

福岡教育大学教育学部

はじめに

ブラジルから来ました中村クリスチアネ小百合と申します。家族5人兄弟の末っ子です。日系3世で、母方の祖父母と父方の祖父母は両方とも福岡県出身です。サンパウロ州、マリリア市と言う田舎の街に生まれ、2002年にサンパウロ市へ引っ越し、サンパウロ大学で心理学の勉強を始めました。2006年に卒業し、8年以上、輸入管理コーディネータとして貿易会社に勤めていました。

私は母国のブラジルを愛しています。自然は綺麗、人は温かい、自然災害もあまりなくて、ブラジルは本当に素晴らしい国だと思います。けれども、良い事ばかりではなく、暴力、差別、汚職、様々な問題もあります。どのように、この状況を変えられるか、どのようにすればもっと私の国に貢献出来るかと考えていたら、一つの道は教育、特に道德教育だと思いました。子供達への教育を通してブラジルの社会の発展に貢献したいという気持ちがどんどん強くなって、夢を描き始めました。でも、どこから始めるのかが一つの問題でした。私達ブラジル人は日本国と日本人をととても尊敬しています。おもてなしの文化、尊敬、正直、感謝、思いやりといったいわゆる道德的な面を含めた教育理念を日本は伝統的に実践しているイメージがあります。この実践について勉強して、日本で実際の授業を受け、より多くの方々と話し、交流し、考え、道德心に関する知識を吸収したら、すごく勉強になるのではないかと思い、福岡県移住者子弟留学生になろうと決めました。

勉強の事

平成28年4月から一年間の予定で福岡教育大学の学部研究生として留学しています。この一年間の一つの目標が日本語の上達で、読み、書き、コミュニケーション、聴解、総合、色々な日本語の授業に出ています。4歳から16歳までブラジルで日本語学校に通っていましたが、16年は日本語の勉強を全然していませんでしたので、ほとんど忘れていました。今は、日本に着いた時より、日本語が少し良くなりましたので、とても嬉しいです。帰国後も日本語の勉強をし続けたいと思っています。

日本の教育、文化、社会をもっと深く知るため、「日本の教育制度」、「異文化交流の心理学」、「比較教育文化論」、「日本事情」、「道德教育の方法」の授業も受けています。現代日本の概要、学校制度、教育行政制度、歴史、異文化ショックや異文化トラブル

の先例について学び、日本の学生と他の国の留学生と話し合い、色々なテーマについてディスカッションをし、学外に見学に出かけ、日本の教育、文化や社会について知る同時に、母国の教育、文化や社会についても理解を深めていると思います。

大学の授業以外には、小学校、中学校に行ったり、教育に関する講義や行事に参加しています。主に、道徳授業の見学をしています。授業の内容、目当て、形式、教育方法、大学の授業で学ぶ日本の教育制度を自分の目で見て、学校の教員や校長先生と話す機会もあり、大変勉強になっています。さらに、指導教員といつも様々なテーマについて話し合い、研究の方向を教えていただき、本当に貴重な学習を受け取っています。この留学を通して、日本の学校、特に道徳教育について少しは分かるようになりました。価値観、性格は家で形成されることもあり、学校や社会の影響の可能も強く感じました。母国でこの影響を積極的に与える方法を考えることが今からのチャレンジで、この一年に学んだ知識を活かして帰国後にも頑張り続けたいと思います。

日本での生活

今回日本に来るのは四回目です。乗物は便利、食べ物は美味しい、安全、人は親切、日本はとても住みやすいとかねてから思い、新しい生活に慣れるのはあまりにも難しくありませんでした。初めて一年間滞在したことで、四季を一つ一つ楽しみました。桜、チュウリップ、藤の花、バラ、アジサイ、ひまわり、金木犀、紅葉、日本のフローラの美しさを見ていつも元気をもらい、ラーメン、もつ鍋、焼肉、お寿司、お刺身、焼き鳥、カレー、お好み焼き、チーズケーキ、シュークリーム、博多通りもん、数え切れない日本の食べ物の美味しさを味わいました。

旅行が大好きなので、富士山登り、糸島、別府、湯布院、静岡、大阪、姫路、京都、奈良、神戸、広島、宮島、箱根、東京、色々な所に行き、日本の文化や歴史をもっと知ることが出来ました。

ホームステイ、バーベキュー、温泉、浴衣着付け、テレビ番組、野球の試合、田植え、生け花、カラオケ、海岸、子弟招へい事業、フェスタドブラジル、熊本のボランティア、花火大会、祭り、観光、ブドウ狩り、ハロウィンパーティー、着物着付け、茶道、ハイキング、コンサート、相撲、ビジネスマナーの講義、運動会、クリスマスパーティー、国際交流センター、家族会の方々のお蔭で、私達留学生は色々な行事に参加し、様々な素晴らしい経験をする事が出来ました。

大学で学んだ事だけではなく、毎日の生活もすごく勉強になりました。日本に来て、多くの人に出会い、日本に住んでいる親戚や友達と会い、一人一人私を心優しく支えて下さったお蔭で私は元気に毎日この一年を楽しく過ごせました。

最後に

長い様で短かったこの一年に、一生忘れない、たくさんのいい思い出を作りました。この様な素晴らしい機会を与えて下さった福岡県庁、福岡県国際交流センター、ブラジル福岡県人会、大事な知識を教えて下さった福岡教育大学の先生方、いつもサポートして下さいました福岡県海外移住家族会、保証人の皆様、先輩の皆様、福岡教育大学連携推進課、学生の皆様、そして日本で友達になってくれた皆様、大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。

この留学を通して、様々な人に出会い、話し、交流し、考え、新たな体験をし、貴重な知識を学び、自分の世界が広がりました。本当に素晴らしい一年でした。言葉では足りない、心から感謝しています。これからもこの経験を活かして、自分の夢にも、母国の県人会にも頑張りたいと思います。そして皆様にまた会える日を楽しみにしています。

どうもありがとうございました！！

P. S.

この一年に、一番心の中に残っている一つの事は忠六おじさんと会った日です。忠六おじさんは私の父方の祖母の弟で、今はもう100歳です。驚くほど、耳も良く聞こえる、目も良く見える、手も震えずに、今でもとても綺麗な字で素敵な詩を書きます。あの様に元気に100歳まで生きる秘密は「笑顔と感謝」と教えてくれた。そして「おじさんに今の一番楽しい事は何んですか」と聞くと、「全て」と答えてくれた。この様な大事な教えをいただいて本当にありがたく思い、これからも心の中に感謝いっぱい、いつも笑顔を見せて、全てを楽しんで生きたいです。



福岡教育大学 教育学部
教授 堺 正之
(中村指導教員)

中村さんは、ご自身の国ブラジルで暴力、差別、汚職などが頻発する背景として、道徳的価値観の欠如が問題であるにとらえ、そのような状況を変革するための一つの道を教育に見出したいとの願いをもって本学で学ばれました。そして、児童生徒にただ知識を習得させるのではなく、道徳的な面を含めた教育理念を実践することが、国民の人格形成や習慣を変える可能性を有するのではないかと考えをお持ちです。

ブラジルの学校には日本のような道徳の授業がないため、日本における道徳の時間を中心とする道徳教育について文献を読み、その上で、本学で受けた授業、同級生や私たち教員との話し合いと交流、自身の調査内容（授業等の見学やアンケート調査の結果）についてレポートをまとめられました。その間、指導する私にとっては、あたりまえの事として考えてきた日本の道徳教育の方法を、中村さんの視点を通して見つめ直し、自身の立ち位置を知る機会ともなりました。

「道徳教育」を「人格の基盤となる道徳性を育てる教育」と考えれば、それを不要だという意見は出ないでしょうし、実際に世界中どの国の学校でもそのような教育は行われているといえます。しかし、実際に外国の「道徳教育」を論じるのは、そんなに簡単なことではありません。様々な名称で行われている「道徳教育」的なものを括って切り取ろうとしても、決して日本の道徳教育と相似形にならないのです。そのため、「日本ではこのようにしている」といっても、「だからブラジルも見習うべきだ」とは、やはり今でも言えません。

中村さんのレポートに述べられているように、社会の行動、習慣、動き方、価値を変更するためには、様々な方法が考えられます。その多様な選択肢の一つとして、日本の道徳教育の方法が考慮されるようになれば幸いです。



ブラジル福岡県人会

浅野 レナン ゆうじ

九州大学 大学院経済学府

始めに

私はブラジルから参りました浅野レナンゆうじと申します。ブラジルのサンパウロ州サンパウロ市から参りました。二人兄弟の次男で29歳です。日系三世で、祖父が福岡県の大刀洗で生まれて、ブラジルに移住しました。私は、サンパウロ大学(USP)では、経営学を勉強し、2009年に卒業しました。卒業後は、現在までに勤務した五社の会社で経営に携わる仕事をしてきました。

留学生として、生まれて初めて長い期間を家族と分かれて住むことになりましたが、考えると、今までの人生の中で一番多くのことを学んだと思います。日本での生活を経験し様々な日本文化を体験することでした。たくさんの思い出ができ、本当に忘れられないことばかりです。ブラジル福岡県人会の皆さんや福岡県国際交流センターの方々や家族会の人々のおかげで多くの豊かな日本文化に触れ、歴史を知り、史跡を訪ねることができました。その上、いろいろな面白いイベントに参加する機会をいただき、色々お世話になり、心から感謝しております。

私はこの留学の目標として、主に五つを設定していました。それは、

1. 親戚に会ってルーツを知ること
2. 日本式の経営を学ぶこと
3. 日本語を上達させること
4. 日本の文化と習慣を学ぶこと
5. 自分自身を成長させること

全てを果たすことができたと思います。

1. ルーツを知ること

第1は「親戚に会ってルーツを知ること」で、早速、5月に母方の祖父母の出身に当たる久留米の大刀洗で家族会の青木さん宅にホームステイで泊まらせていただきました。祖父母と関係がある色々な場所を案内していただいて、ルーツと家族の歴史を知ることができました。その時は、その地方に住んでいる親戚を見つけることができませんでした。その8月に家族会が探して見つけてくださったので、驚きました。家族会のお陰でその親戚に初めて会うことができました。来日前には、この家族の関係はブラジルの親戚のみんなは全然知りませんでした。未知のルーツのことを発見して、お盆の休みにもう一度訪問して、その上全部の親戚を知ることができました。

父方の親戚も久留米に住んでいます。今まで3回会うことができ、いろいろな話をしたり、ルーツのことも知ったり、子供と遊んだり、一緒に柳川で川下りをやったり、とても懐かしい気がして、身近に感じました。

2. 勉強の事

第2の目標は「日本式の経営を学ぶこと」で、私が留学しているのは九州大学です。九州大学は多彩な研究で非常に有名で規模の大きい大学として知られています。注目すべき講義に有力企業の経営者や多分野で活躍している人が参加し、世界各国から様々な留学生も在学し、私は九大で勉強することは本当に光栄だと感じております。私の専門分野である経営学は内容が広範囲で、経済に関する様々な事業に応用できるのです。

経営学の中で、私が一番興味がある分野は「アントレプレナー」についてです。いろいろな講義を受けた中で一番面白かったのは、「九大生よ、ビジネスを学ぼう」という授業でした。毎週、各業界で活躍している企業家が講義をし、実社会における経済状況を反映する内容でした。毎週異なる分野の企業が登壇し、スピーチの後で質疑応答があり、質問に対する解説も丁寧で解かりやすく、すごく為になりました。

それから、一番面白かったワークショップは「Start-up Weekend」と「Global Seminar」というものでした。「Start-up Weekend」には異分野からの九大生が参加し、いつかのグループに分かれて新しいビジネスのアイデアを練り、最後にお互いのビジネスのアイデアを紹介します。一番優れた発表は専門家グループに選ばれて賞を貰います。私のグループは優勝しませんでした。初めて日本でこのような実用的な学習活動を経験しました。グループディスカッションし企画を立てるという展開も非常に良い勉強でした。「Global Seminar」は、

スエーデンの先生の授業で、内容はアントレプレナーと業界の新しい動向でした。講義も質疑応答の内容も素晴らしかったので、いい勉強になりました。

3. 日本語の勉強

第3の目標は「日本語を上達させること」で、九州大学と福岡県国際交流センターこくさいひろばでの日本語の授業を受けました。それと、読解能力を上げるために新聞記事を読む練習をしました。更に、日本語能力試験N2に挑戦しました。そのため、たくさんの参考書と電子辞書も買って、8月から12月まで毎日一所懸命勉強してきました。私の日本語の先生が「そんなに一所懸命の勉強する学生は、ゆうじさんが初めてです。」と言ってくださり、頑張りを認めてくださったのだと、感動しました。試験は12月4日に受けましたが、まだ結果は出ていませんので、授業と勉強を続けています。しかしながら、現在の日本語能力と日本に着いた時の能力とを比べると、本当に頑張った甲斐があり、今は日本語での会話に対する自信が前より持てるので、嬉しいと感じています。

4. 日本の文化と習慣を学ぶこと

第4の目標は「日本の文化と習慣を学ぶこと」です。主に家族会と福岡県国際交流センターのおかげで多くのことを体験することができました。例えば、美しい桜を満喫、田植え、生け花、数々の城や神社や寺の訪ね、小学生との交流、着物の着付け、茶道、和太鼓を叩き、書道、いろいろな和食を作って食べ、各地の祭りや旅、ボランティア活動、紅葉、花火大会、日本式のお正月、ハロウィンやクリスマスパーティなどです。初めて桜を見る体験で、あたり一面に咲く満開の日本の桜を見て、今までこのような美しい桜を見たことがありません。それと、小学生との交流で、児童は学校の建物の掃除を自分たちでやって、昼ご飯の給食の配膳も手伝いますので、子供たちは凄く偉いなと思いました。

それから、夏と冬の休みに日本を旅行してきました。有名な観光地や伝統的な場所を訪ね、友達や親戚と会い、とても楽しい時間を過ごしました。例えば、京都、奈良、大阪、広島、宮島、東京、下関、山口、岡山、別府、阿蘇山、日光などです。京都と奈良は歴史が豊かに残り、神社と寺は素晴らしかったです。広島で広島平和記念資料館を見学し戦争と平和について深く考えさせられました。宮島の自然と一体となった景色は凄く綺麗でした。日光で初めて雪を見て、触ったり、遊んだりしました。

5. 自分自身を成長

第5の目標は「自分自身を成長させること」です。私にとって新しい社会で生活することにより、様々な価値観を学びました。生まれて初めてこのように長い期間を家族と分かれて住むことになり、初めて自分でいろいろなことをやり遂げていい勉強になりました。例えば、料理や掃除や洗濯や、知らないところへ一人で行くことです。それから、交流を結ぶ中で得たことで日本人を尊敬することは、日本人の親切心とチームワークです。嬉しいことに、何人も日本人と仲良くなり、一緒にたくさんのことを楽しんだりしました。どんなに遠く離れていても、この友情を守りたいと思います。言うまでもなく、この間に楽しいことばかりだけではなく悪いことや艱難辛苦もありました。しかし、それは自分自身への挑戦だと思います。自分で解決できてもできなくても、兎に角頑張りさえしたら、最後に必ず良い人生の勉強になります。そして、この挑戦しなければならないことが多くあり、それを乗り越えることができた今は、非常に感謝しています。

最後に

この日本で過ごした期間は本当に早く過ぎたように感じます。今までの私の人生の中で、何にもましてこの日本での留学生生活が一番良い経験だと思います。これからは、九州大学や普段の生活で学んだ日本文化と福岡の文化そして価値観を、ブラジルの人びとに伝えたいと思います。



九州大学経済学研究院
教授 山本健兒
(浅野指導教員)

私が浅野レナンゆうじ君の九州大学への留学を受け入れることになったのは、偶然によるものです。浅野君は、アントレプレナーシップ教育の受講を希望していました。ところが、この分野に関する九州大学での教育実施主体であるQREC（ロバートファン・アントレプレナーシップ・センター）教員は、浅野君の指導教員になることが制度上できないとのことでした。その理由は、九州大学大学院の学府研究生となるためには、本学の制度上、大学院教育の実施組織であるいずれかの学府の教員が浅野君の指導教員になるしかないので、QRECは学府ではなく、この組織の教員は制度的にどの学府にも所属していないからです。しかし、このことは九州大学外の人には分かりにくいことですし、九州大学教員である私から見ても、あまりにも形式的あるいは官僚主義的に過ぎると思います。

浅野君はすでにブラジルでの大学院修士課程を修了していたので、学部研究生ではなく、学府研究生になる資格を十分持っているのですが、このことを貝塚地区事務部教務課学生第四係の職員も、経済学府の私の同僚たちも十分には認識していなかったように思います。

本学経済学府留学生担当の先生が、九州大学として浅野君を受け入れることのできるぎりぎりの時点で、私に浅野君の指導教員になってもらえないかと依頼してきたのは、2016年3月だったと記憶しています。福岡県の県費留学生としての来日が決まっていたにもかかわらず、受け入れる大学と指導教員が決まらない状態ではまずいと考え、私がアントレプレナーシップ教育をすることは無理だが、形だけでも受け入れ教員になるべきであろうと判断し、浅野君の受け入れを承諾したというわけです。

浅野君は4月に来日して間もなく、福岡県国際交流センター職員とともに、私の研究室に挨拶に訪れました。私の第1印象は、礼儀正しく意欲ある青年というものでした。浅野君は日本語をある程度話せましたが、少しこみいったこととなると英語でやり取りせざるを得ませんでしたし、アントレプレナーシップ一般についてではなく、日本のアントレプレナーのことを勉強したいという希望を表明したので、次のような提案をしました。

大学以上のレベルでの勉学・研究をするためには現地語新聞を読む能力を身につける必要があるので、毎週1回浅野君と1対1で新聞を読みましょう。ただし、読むべき新聞記事は浅野君自身にとって興味あるものを浅野君自身が選び、その記事のコピーを2部とり、1部は私に渡し、1部は浅野君自身が音読するためのものとしてください。

浅野君は、上の私の提案を受け入れてくれました。そして、私の都合がつかない時を除いて、無遅刻無欠席で、1対1の読書会を続けました。浅野君は毎週の読書会各々の1週間前以内に発行された日本経済新聞、日経産業新聞、日経流通新聞（MJ）、西日本新聞、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞などから、日本のアントレプレナーに関する具体的事例や、日本のビジネスに関する記事を選んできて、もちろん周到的な予習をしてきて、私との読書会に臨んでくれました。浅野君が選んだ記事はいずれも興味深いものであり、わたしが読んでいなかったものばかりでしたので、私自身も大いに勉強になりました。おそらく、読むべき新聞記事を探すだけでもかなりの時間を使ったでしょうし、音読できるようになるだけでなく、その意味を理解できるようになるための予習時間を相当長く要したであろうことは想像に難くありません。もちろん、浅野君にとって記事の理解に困難な文章があれば、それを解説しましたし、記事の内容に関してのディスカッションを日本語あるいは英語でしました。

今年1月になってから気が付いたのですが、浅野君の手元に置いた新聞記事コピーは拡大されたものであり、それにびっしりと漢字の読み方に関するルビをふってありました。そこで私は、ルビをふって予習をするのはよいけれども、日本語能力を身につけるためには、ルビをふっていないものを繰り返し音読することが必要ですよ、と諭しました。それはともあれ、浅野君は私との読書会だけでなく、QRECやビジネススクール（経済学府産業マネジメント専攻）の授業をも熱心に受けていました。この1年間の九州大学での勉学で、浅野君にとって得るものがあつたと信じています。今後も日本への興味を維持し、日伯の架け橋の一人として活躍してくれるものと期待しています。



ブラジル福岡県人会

清水 愛実 サラ

九州産業大学・芸術学部

はじめに

私は平成 28 年度の福岡県移住者子弟留学生の清水サーラと申します。ブラジル、サンパウロ市出身の日系二世です。2015 年にサンパウロ州立大学（UNESP）で芸術学部を卒業して、SESC 文化センターで美術教育活動をしていました。そして、2016 年の 4 月から県費留学生として九州産業大学で美術を勉強し始めました。

母は福岡県の飯塚町出身で、1960 年、まだ子供のころに祖父母と一緒にブラジルへ移住しました。言語も文化も違う国で暮らし、つらい入植地での生活に耐えなければならない日本人にとって福岡県人会は重要な組織でした。それから約 60 年後、亡き祖父母とブラジル福岡県人会のお陰で私はこの素晴らしい留学体験をすることができました。感謝の気持ちを込めてこの最後の報告書を書きました。

アイデンティティ

ブラジル日系人としての私は、今まで自分の「アイデンティティ」をどこにおけば良いか定めにくいと思っていました。ブラジル人の友達と付き合うと私はやはりブラジル人ではなく、とは言え、両親や親戚と話し合っても私はたしかに日本人ではないのだと何回も考えたことがあります。そういう悩み事はきっと悪いことではないと分かっていますが、やはり気になることでした。日本へ来てから、それは悩むのではなく、「自分自身の見方」によって周りをみることができると考えるようになりました。

「ブラジル人の考えかた」や「日本人の考えかた」によって人や物を区別するよりも、それぞれの文化の美しさを吸収して、ユニークな見方を作っていく方が良いと思い、今ではこのことをなんとなく周りの人々にも伝えて生きていきたいと思っています。

生活について

日本へ来る前に色々な細かいことについて心配でしたが、福岡県国際交流センターのスタッフの方々や家族会の方々に何でも相談できる環境が整っているのが分かって安心しました。

この一年間、福岡市の香椎駅の近くにある寮に住みました。私が毎日かよっていた九州産

業大学は寮から歩いて 25 分でした。他の県費留学生と比べて一番近い大学でしたから毎朝のんびりしていくことができました。

日本に住んでいる間、果物や野菜がブラジルと比べてどんなに高いか分かりました。それで、家族会の方から自宅でできたお野菜や果物をもたらした時が何回かあって、とても嬉しかったです。福岡の食べ物はすごくおいしくて、きっとブラジルへ戻ったら「あれ食べたい、これ食べたい」って言うと思います。特に福岡のラーメンや餃子を懐かしいと思うでしょう。

日本でとても感動したのは道がきれいなことというのがありますが、町中にある池や川、そして浜も、ものすごくきれいだと思いました。アヒル、カメ、さまざまな魚、そして、エイまで見たことがあります。サンパウロでは流れている川が残念ながらきたなくて、近くによるときつい匂いを感じます。ブラジルがいつか日本みたいに天然資源を大事に守るようになることを期待しています。

日本人の人間関係はとても複雑だと思いました。日本には階級制度はありませんが、社会における階層のようなものはどこに行ってもあるものだから、言葉の使い方やマナーを人または場所によっては注意しないといけないことに気がつきました。また、日本人の同級生の多くはシャイで私に声をかける自信があまりないと感じました。私の方から何かを尋ねた場合には、優しく教えてくれることもよくあったので助かりました。

日本人の宗教性もとても複雑だと思いました。仏教と神道を混ぜて「自分が信じたいことを信じていい」ようです。そのことに私は好感を抱きました。神社やお寺や教会など、どこにいても、自分が信じる「神様」との関係は自分だけのものになっている日本人は他の国と比べて平和だと思いました。

大学

2016 年の 4 月 11 日から九州産業大学で美術を勉強しました。最初はとても不安でした。とくに、学術用語や敬語の使い方になれてない私は、先生方や同級生に迷惑をかけたくなかったので、話し方に注意しないといけないと思っていました。でも、先生方と話してみると学術用語や敬語を使った「ものすごい日本語」で話さなくて大丈夫でした。自然に会話ができて嬉しかったです。日本語で分からない言葉はもちろんありましたが、よく分からない言葉を使うよりも、自分の知っている言葉をうまく使って相手に伝えた方が気持ちを伝えることができました。知っている言葉で伝えたいことを伝えるのがどんなに大事か理解できました。

初めて大学へ行った時、指導教員の先生にガイダンスをしていただき、大学の設備や施設を見せていただきました。いろんなアトリエを見て、学生たちの作品も見ました。とても素敵な絵や彫刻がキャンパス中に飾ってあり、感動しました。早く勉強を始めたいとワクワクしました。

勉強のこと

私が在籍したのは九州産業大学の芸術学部でした。一年間の研究で様々な授業を受けることができました。それは日本画、インスタレーション、陶芸、金工、染織（繊維芸術）、リトグラフ、そして、銅版画でした（美術の授業以外に日本語の授業も週に5回受けました）。

- 日本画

まずは日本画の美しさに感動しました。先生が見本として見せてくれた作品はとても素敵で授業中であるのも忘れ、感動で涙が出そうになりました。日本画は、千数百年以来続いている絵画様式が基本となっており、その画材となるものも歴史に培われた伝統的な素材です。一般には紙や絹、木、漆喰などに、墨、岩絵具、胡粉、染料などの天然絵具を用い、膠(にかわ)を接着材として描く技法が用いられています。また、金などの金属材料(金箔など)が画材として効果的に取り入れています。日本画用材料の扱いはとても難しく、集中力や穏やかな心を保つことがとても必要だと思いました。

- インスタレーション

インスタレーションというのはある特定の室内や屋外などにオブジェや装置を置いて、作家の意向に沿って空間を構成し変化・異化させ、場所や空間全体を作品として体験させる芸術です。先生が提案されたのは布の軍手を使って作品を作ることでした。日本へ来る前からよく私の作品に出てくるものは白いサンゴです。サンゴの体内には、直径 1/100 ミリくらいのとても小さな「褐虫藻」という植物プランクトンがたくさん生きており、活発に光合成をしています。その植物プランクトンが死亡するとサンゴが白くなって、その「白さ」で全体的に死亡したことを示すのです。「死」が白く現れることが今まで気になっていました。それを考えながら白い布の軍手を使ってサンゴを作成しました。大学にある彫刻台に載せて展示しました。

- 陶芸

陶芸の授業ではロクロを使ってお茶碗やマグカップを作りました。作品を左右対称に作るのは、一見易しそうですが、実はすごく難しいのです。一回、全然知らない人から「陶芸がゆがんどったら心もゆがんどる」と真剣に言われて、私は心配しながらも、とりあえず笑い、「やっぱり日本人の考え方だなあ」と思いました。今まで完璧な陶芸ができてなかったのが「ゆがんでいるものが私の特徴」と思い、トレードマークとしていたのですが、その言葉が少々気になりました。陶芸の先生方は、私が何度失敗しても優しく教えてくださったので、私は本当に恵まれていたと思います。

- リトグラフ

二学期から版画の授業も受けて、そこで石版画（リトグラフ）をし始めました。リトグラフ（lithograph）は版画の一種で、平版画にあたるものです。水と油の反発作用を利用した版種で、製作プロセスは大きく「描画」「製版」「刷り」の3行程にわかれています。ブラジルの大学ではリトグラフをする機会がなかったので楽しみにしていました。インク、溶剤、水を使う順番は一つでも間違えれば失敗してしまうため集

中しないといけません。先生がやっているのを見ると簡単そうだと思ったのですが、実際にやってみるととても難しいプロセスでした。とくに色を重ねることが難しかったです。

- 銅版画

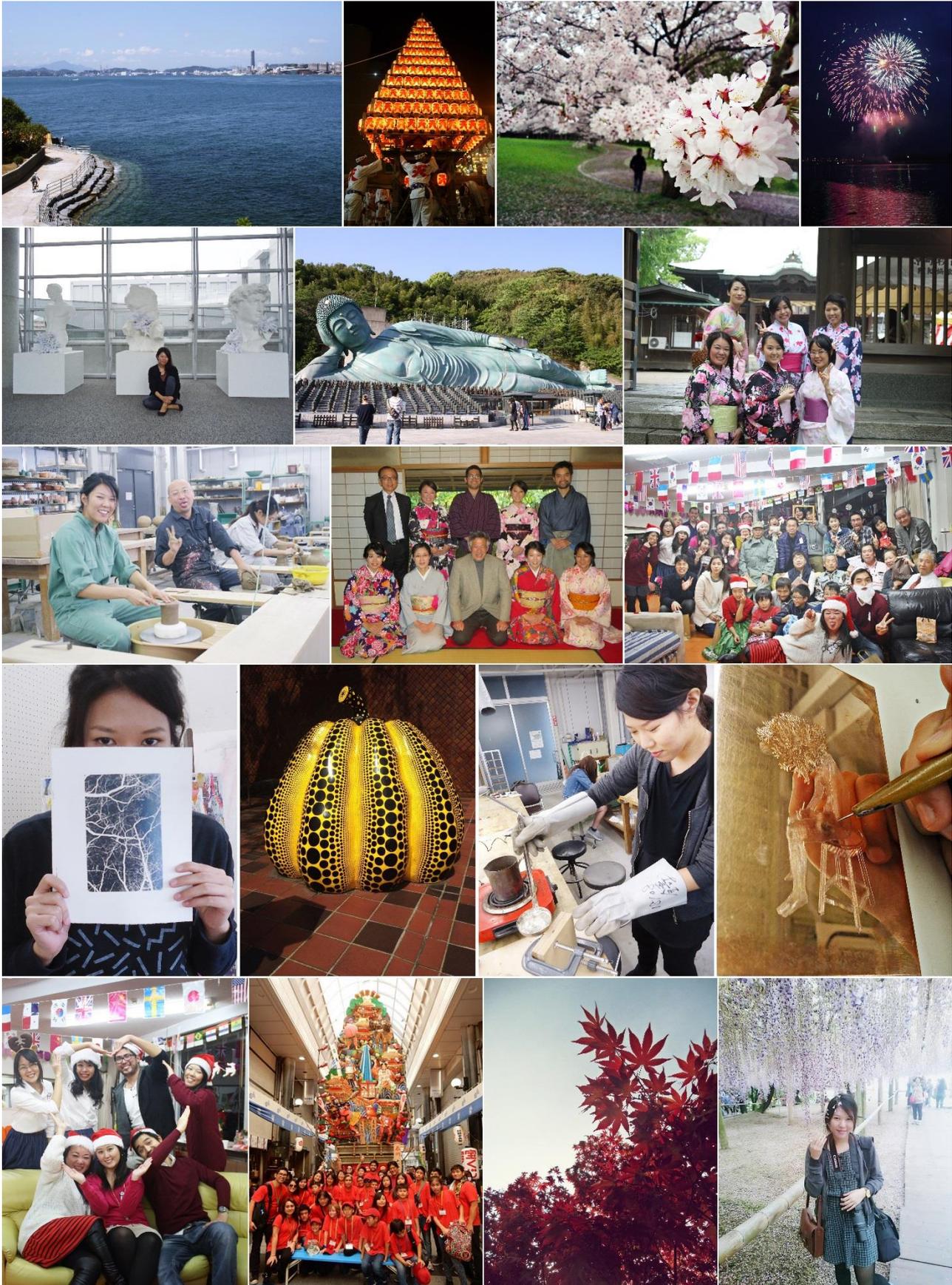
銅版画は一度ブラジルでやったことがあるのでどんなに複雑なプロセスか理解していました。今回やってみた銅版画の技法は「ドライポイント」でした。「ポイント」という金属の針で銅を彫っていきます。手の力で引っ掻くので、それほど深い溝はできません。直接工具を使って銅版を彫る技法です。掘った後はインクを銅に広がせて刷ります。

ブラジルの美術大学で学ぶ技法は西洋文化を中心にしています。特にフランス、イタリア、イギリス、そして、アメリカの研究を身に着けて教育されています。日本をはじめとしてアジアの文化はあまり時間をかけて勉強しないので残念だと思います。この留学では日本独特の美術感覚を学ぶことができましたのでとても嬉しく思っています。

最後に

私は、福岡県人会がどのような組織か、昔、祖父から聞いたことがありました。それは福岡県出身の移住者がいつまでも祖国日本の福岡を心のふるさととして忘れることなく、つらい入植地での生活に耐えるために、日本人として、また福岡県民として互いに助け合い協力し合うために、どの県よりも早く創立された県人会だと言うことです。これからは、亡き祖父母のかわりに、県会の活動に参加させていただきたいと思っています。できれば、文化交流の特に芸術・美術関係で福岡とブラジルの架け橋としてお手伝いできれば幸いに思います。

この留学制度に参加することができたのはただの偶然ではなく、何百人、何千人の方々のご協力があったおかげです。多くの皆さまのおかげで、日本で勉強することができました。ブラジル福岡県人会の皆様、福岡県国際交流センターの皆様、家族会の皆様、天国にいるおじいちゃん、おばあちゃん、どうもありがとうございました。この一年間に作った思い出は一生忘れません。



九州産業大学 芸術学部
教授 古本元治
(清水担当教員)

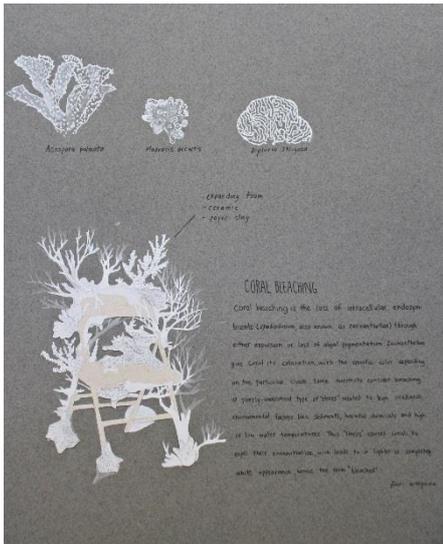
清水さんは、私の講座において「インスタレーション」と「版画」を学部と大学院の学生と共に学びました。

「インスタレーション」ではサンパウロ州立大学で学んだキャリアを生かし、クオリティの高い作品を完成させました。作品だけではなくエスキースもレベルが高く、コンセプトや技法・表現も明確であり大いに評価することができました。また、大学院1年の学生と共に九州産業大学美術館オープンスペースにおいて4人のグループ展を開催し研究発表を行いました。

「版画」の授業ではリトグラフと銅版画を学びました。リトグラフではコピー転写技法による多色刷り作品を完成し、銅版画においてはエッチング技法による作品を完成させました。リトグラフと銅版画の両版種とも多作であり、その積極性は評価できます。

日系人である日本とブラジルの両文化に育った清水さんの視点は、アートにおいて貴重な個性として展開が期待でき活躍できると思います。また、制作や発表活動は学内において刺激を与え、共に学んだ学生達の視野を広げる機会となりました。

日本における積極性と誠実な取り組みは、貴重な経験となり将来の芸術活動に対し大いに期待がもてます。





ブラジル福岡県人会
池尻 直美 カレン
九州大学大学院 薬学府

最初に

私はブラジル福岡県人会から来ました池尻直美カレンと申します。25歳です。ブラジルサンパウロ市出身の日系3世です。私の祖父は米国カリフォルニア州で生まれましたが、日本人として帰化し、私の祖母は福岡県の久留米市で生まれました。

2014年6月、私はサンカミロ大学薬局で薬学を卒業しました。卒業して2ヶ月後、創作薬局で最初の仕事を始めました。1年半後に私は平成28年度福岡県移住者子弟留学生として選ばれ、一年間の勉強を続けると同時に私の家族のルーツについてもっと知るために日本へ来る事ができました。それ以外にも、私は日本の文化に大きな関心を持っています。私は薬学を学んでいる妹もいます。だから私は彼女もこの機会を享受できることを願っています。

福岡での生活

今回、日本は私の二度目の来日です。5年前、千葉県の観光客として友人と一緒に来ました。九州を訪れるのは初めてです。国がどんなに素晴らしいかと、忘れていました。どこでもきれいで、交通は非常に効率的で時間厳守であり、人々は敬意を表し、夜間には通りは安全です。ブラジルとは正反対です。ここはとても住みやすく安全な国だと思います。

私がプログラムに受け入れられた事を知った後、ブラジルでは数年前から日本語を勉強していましたが、私は言語について非常に不安でした。しかし、家族と話をして、特にお父さんに説得されて日本で多くの経験と日常生活の後、諦めずに頑張ることができて本当に嬉しいです。日本に到着して以来、福岡県、製薬分野、私の起源についてもう少し知る機会がありました。

プログラムの初めに、福岡県国際交流センターと家族会のメンバーにお会いし、とても歓

迎されました。また、寮の後藤さんご夫妻が私たちを新しい場所に迎え入れてくれて、「自協学舎」の寮に歓迎されました。最初の日からパラグアイ、ペルー、ボリビアなどの留学生と友達になりました。合計で我々は2016年の7人の福岡県費留学生です。家では、ポルトガル語、日本語、英語、スペイン語の4つの言語を話します。

福岡でよさこい・ソーランのグループに出会って、演奏を2回見せて貰いました。彼らを見て、ブラジルのグループと一緒に踊った時のことが懐かしくなりました。

5月には私の親戚の家でホームステイをしました(堤さん：家族会のメンバー)。さらに、5日は私の誕生日でした。多くの友達に祝ってもらいとても嬉しかったです。7月には、様々な国（ブラジル、アルゼンチン、ペルー、パラグアイ、ボリビア、コロンビア、メキシコ、サンフランシスコ、ハワイ）からの子供たちが2週間、日本文化を体験し、他の子供と意見を交換する交流プログラム「県人会担い手育成招へい事業」が行われました。プログラムでは、茶道、日本学校との交流、豊田工場、福岡県知事訪問、市内観光など多彩な活動を行いました。子供たちはこのプログラムにとっても感動していました。短期間に子供たちは多くの日本の経験を生かし、それぞれ自分の国へ戻ってとても幸せそうでした。

福岡県国際交流センターと家族会の皆さんは、浴衣、着物、茶道、葡萄畑、山道、田植え、日本の学校訪問、生け花、城など、様々な日本文化を楽しむ機会を多く与えてくれました。皆さんのおかげで、福岡の文化や地方についてもっと知る事ができました。また、北九州、山口県、熊本県、大分県などの地域を訪れました。

後藤さんは、私たちが何かを必要とする時、いつも宿泊施設で私たちを助けてくれました。寮でハロウィーンとクリスマスパーティーを開催する事ができました。両方ともとても楽しかったです！彼らがこの機会を与えてくれて、私たちと一緒に参加したことに感謝しています。

日本では今年の春夏秋冬を見る事ができました。私たちは春に、桜や他の花がいっぱいの季節に到着しました。夏の間は、浴衣を着てたくさんの花火を見るのはとても楽しいことです。秋には、日本で一番有名な紅葉、美しい赤色を見る事ができました。そして、今私たち

は冬に、凍った風に恵まれますが、暖かいものを飲むのが理想です。すべてはとても美しいですが、私のお気に入りには秋と冬です。

大学

4月には九州大学の薬学部で授業が始まりました。クラスは月曜日から金曜日の午前9時30分から午後6時30分までです。私は師匠の師匠、濱瀬健二先生、助教授の古賀玲子先生、そして私のクラスメイトに会いました。日本で最も有名なブランドのひとつである資生堂と呼ばれる化粧品会社と協力しています。11月に東京で発表したプロジェクトの研究者として働きました。私のプロジェクトは、アミノ酸分析が行われるHPLC (High-Performance Liquid Chromatographic) と呼ばれる特定の洗練された装置に依存しています。研究から私は臨床と美容分野についてももう少し学びました。そこでは様々な科学論文を取り上げたセミナーを開催しましたが、資生堂の研究にとって重要な製品である黒酢が生産されている鹿児島県とプロジェクトのプレゼンテーションに大分県を訪れる機会がありました。1月に、横浜に本社の知り合いである東條先生によって招待され、岡村先生が大変親切に受け入れてくださいました。私は皆さんが 実行する作業のほとんどを知る事ができました。先生と助手のおかげで、私は製薬分野での知識を向上させる事ができたので、とても感謝しています。最初の学期には、九州大学箱崎キャンパスの日本語教室に週2回出席しました。コースでは、アメリカ人、中国人、ルーマニア人、タイ人、韓国人など、多くの日本人や国際人の友達を作ることができました。日本語を少しでも学ぶことができました。

日本での休暇旅行

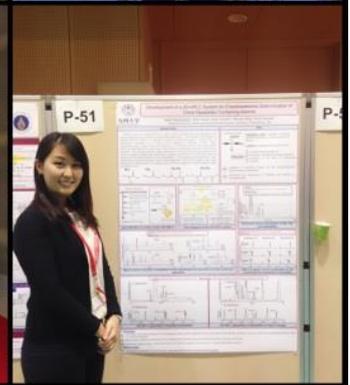
一年間、私は時々親戚の家に招待され、8月には兵庫県の姫路に行きました。そこで城を訪問し、旅館で夜を過ごす機会がありました。そこにはリラックスした温泉もありました。夏休みに全員の留学生たちと、大阪、奈良、京都、姫路、岡山、広島を訪れました。これらの場所のほとんどはブラジルの友人の家に泊まりました。日々はとても暑かったです！ 温度は約37度でした。

冬休みに彼氏がブラジルから私に会いに着てくれました。東京で1週間、横浜、大阪、広島、沖縄で何日か過ごしました。クリスマスに私たちは日光に行って、日本で留学しているブラジルの多くの友達に会いました。そこでは一緒にクリスマスパーティーをすることができました。温度は約0℃で、雪を見る事ができてすごくおもしろかったです！

感謝

最初は留学生たちとはあまり親密ではなかったが、今は家族見たいと感じています。私は決して忘れない、愛らしい思い出をたくさん作りました。困っていた時、友人が私を支えてくれました。だからブラジルから遠く離れていても、私は一人だと思っただ事はありません。親戚、ブラジル福岡県人会、福岡県国際交流センター、家族会、九州大学、そしてたくさんの友人のおかげで、経験はすべて可能でした。この素晴らしい機会を私に与えてくれたことにとても感謝しています。皆は私が日本に到着最初の日以来、私を支えてくれたので、感謝したいことが無数にあります。

今、ブラジルと日本の関係をいかに重要なものになっているかがわかります。私は両国の橋のようになり、これからもずっと続くこのプログラムをサポートしたいと考えています。また皆さんと再び会うことを楽しみにしています。この素晴らしい一年のたくさんの経験を心の底から本当に感謝しています。私も歓迎して下さった皆さん、本当に色々お世話になりました。どうか末永く、元気である事を心から願っています。 どうもありがとうございました！ Muito obrigada!



九州大学大学院 薬学研究院
創薬育薬産学官連携分野
教授 浜瀬 健司
(池尻指導教員)

池尻直美カレンさんは、平成 28 年 4 月から九州大学に在籍し、29 年 3 月まで 1 年間、薬学府の研究生として研究活動を行ってきました。当分野を志望した理由は化粧品や美容に関連する研究に興味があったということで、資生堂との共同研究を行っている私達の研究室に所属することになりました。

私達の研究室ではキラルアミノ酸をターゲットとする新規分析法を開発し、新しい生理機能成分を探索すると共に病気の診断法構築などを行っています。化粧品や美容に関連する研究としては、キラルアミノ酸の中で、特に D 型のアミノ酸が皮膚に存在することを明らかにし、資生堂との共同研究でこれらが水分の保持、バリア機能の強化、コラーゲン産生の促進など、新たな機能を有することを明らかにしています。これまでも綺麗なススメなどの美容飲料や、URARA、アクアレーベルシリーズなどの化粧品が市販されています。

池尻さんは、これらのキラルアミノ酸類縁化合物として、アミノ酸が 2 分子結合したキラルジペプチドの分析法構築を行い、1 年という短期間ではありましたが、とても良く実験し、二次元高速液体クロマトグラフィーという装置を用いる新規分析法開発を達成してくれました。実際に発酵食品などにキラルジペプチドが存在することも明らかにしてくれております。この成果は池尻さん本人が発表者になり、東京で開催されました第 27 回クロマトグラフィー科学会議にて学会発表を行いました。

この他、天ヶ瀬で開催された第 34 回九州分析化学若手の会に参加したり、坂元醸造の黒酢づくりを行う福山工場の見学、資生堂化粧品関連の横浜研究所などの見学も行き、色々見分を広めてくれたことと思います。研究室生活では、「ブラジルから来た研究生」ということで、私の希望により英語を主体として学生たちとの討論なども積極的に行ってきており、研究室の国際化向上に大変貢献してくれました。教員として、大変感謝しております。

研究生としての期間終了後は、ブラジルに戻り、薬剤師として、また製薬・化粧品分野の会社でのお仕事に戻られると思いますが、1 年間の日本滞在で得た経験が有意義であることと信じております。私も機会があればブラジルに行けることを楽しみにしながら、池尻さんの今後の御活躍をお祈りいたします。



パラグアイ福岡県人会

山崎亜希

中村学園大学 栄養科学部 栄養科学科

はじめに

さかのぼる事56年前、福岡県糸島市出身の祖父母が幼子二人を連れ、はるばる遠い南米へやって来ました。森林の開拓から始まって、根性と努力を示す人達だけが残った移住地。

その気持ちを引き継いだ父と母の元に生まれた日系3世の私は、パラグアイ国イタプア県ピラポ市の自然豊かな大地に触れ合いながらのびのび育ちました。

私は2014年にカトリック大学を栄養士として卒業後、移住地の診療所に勤めていましたが日系人向けの栄養管理を学びたい、そして自分のルーツを知りたいと言う気持ちから留学を決意しました。

日本での生活

みなさんが温かく迎えてくれたあの日のことがまるで昨日の出来事のように。初めての日本で戸惑いや不安しかなかった私は、思いのほか仲間たちや周囲の方々のおかげで自然と打ち解けることができました。

新しい環境に慣れるには多少時間がかかりました。電車や新幹線を目の当たりにした時の感動、どんなに混雑していても行列になって割り込み無しの人ごみ、バスではお客様の安全第一で最後の人が座るまで出発せず、信号待ちでは省エネのためエンジンを止めたりなど驚くことばかりでした。

とても治安が良く住みやすい日本では、マナーには厳しく、時間には正確で、町にはゴミ一つ見当たらず、清潔感があふれてる場所で母国と比較のしようが無いです。人生最大の出来事は地震を体感した事。一度きりかと思いきや何度も訪れる余震は恐怖さえ感じました。

在住して感心したことは、日本人ならではの特徴です。相手を尊重し、身配り気配りを大事に丁寧さ、礼儀正しさや心遣いそれらは、全ておもてなしの心です。このような素晴らしい部分を私達日系人として生まれたからには、受け継いでいきたいです。

日本文化・経験

私たちは、大勢の方と巡り合い色々な形や角度から日本文化に触れました。畳の上でふかふかのお布団で寝たり、慣れない硫黄の臭いの中に入る温泉は気持ち良く、私の中の日本人魂が目覚めた感じでした。

一年間通して変わりゆく四季を満喫しました。来日した時、歓迎してくれた満開な桜、咲き乱れる藤の花、色とりどりのあじさい、お寺や神社で手を合わせ、何千匹のこのぼりが泳ぐ空を見たりしました。夏には梅雨を向かえ耐える猛暑の中、ハイキングしながら歴史の授業を受け、音だけではなく空いっぱい咲く花火を2時間たっぷり味わいました。また熊本でのボランティア活動や賑わうバーベキュー。秋には豊富な果物、もみじやイチョウで鮮やかに街と山が染まり、夜には紅葉をライトアップしたとても贅沢な楽しみ方もありました。寒くなるにつれイルミネーションがどこも魅力的で一年の終わりを告げるようです。お正月を迎えるための餅つきをやってみたり、貫通する寒さを乗り越えたりしました。

日本と言えばやはり富士山。登山の経験もない私は、1から調べて準備を整え後はイメージトレーニングのみ。いざ登ってみると覚悟していた以上に過酷で胸は圧迫され、寒さは増していく中さらに眠気にも襲われました。けれどもご来光を見た瞬間全てが報われた気がしました。もう最初で最後を胸に誓い絶景を目にやきつけました。

農家生まれの私は、トラクターなどに乗る機会はありましたが、裸足での田植え、稲刈り、脱穀どれも大変な作業で“米”が意味する八十八の手間が改めて理解できました。

私が最も興味があったのは、広島と長崎の原爆資料館を訪れることです。被爆者の想いがつづられた動画や手紙を一字一句たりとも読み落としが無いように噛み締めるように読み、溢れてくる涙を抑えながら悲惨さが突き刺さるように感じ取ることができました。

そして華道、茶道、書道、着物の着付け体験どれもドキドキわくわくを隠し切れない幸せな時間でした。

学校・勉強

中村学園大学の栄養科学部には大部教授のご指導の元、4月から新たな学生生活が始まりました。

日本語の会話が達者でもやはり勉強面になると専門用語はとても難しくてスペイン語で分かっている、なかなか日本語までに結びつかないことがあったり、時に四苦八苦することもありました。わかりやすい授業を中心に選んでくださった大部教授のおかげで、調理実習、実習食品の加工と栄養、実験食品の安全性など、これらに関連する病態栄養やライフステージに即した授業を楽しく受ける事ができました。

またゼミの一員としても活動していました。麴を使用した甘酒スムージーの商品化に協力したり、減塩のため塩麴を使った料理に取り組んでみたり。何度も作っては試しの繰り返しです。毎月行われていた栄養クリニック料理教室では、いつもスタッフとして参加していました。バックステージでは仕事がスムーズに進行するには、調理人同士の協力、積極的の行動と限られた時間との勝負です。一番難しいのは出来上がりの味や見た目が先生と全く同じでなければいけないと言う事です。

実習では様々な授業が用いられ、日本人学生とは違って、古き良き日本をそのまま生きてきた日系人（私）には当たり前のように自家製で作るものが大半でしたが、栄養特性や物性をよりさらに分かりやすくする技量、細菌検査などの日本の最先端の技術を学びました。

休日には「栄養士学会」に出席することもありました。常に仕事で集めた情報を元に研究報告をする管理栄養士達。キラキラと輝いて素晴らしく見えました。

一番好きだった科目は、一年と三年生と受けていた調理実習でした。そこで初めて出会った「一汁三菜」は、日本伝統の食事形式です。お膳にご飯、汁物、主菜、副々菜、それぞれが意味を持つ決まった位置に置かれます。その中でも、食文化の分野では、「フランス料理は香り（鼻）、中華料理は味（舌）、日本料理は盛り付け（目）で味わう」と、国によって特徴があることを実践で理解しました。とても印象に残ったのが、やはり和食です。見た目が美しく、お皿の上で華やかに旬の食材が輝きます。ここにも、患者さんに対する気遣いとおもてなしの心がありました。病院食でも、手間隙かけた飾り切、縁起のいい切り方、富士山のように山形で立体感を表す盛り付け、大勢いる患者の一人一人に対応する適切な料理を栄養士ならではの献立をかんがえます。

最後に

この一年間を振り返ってみると、長いようで短かった研修期間は人生の中で最も貴重な時を過ごす事ができました。それは全て出会った方々が注いでくれた、無償の愛情のお陰です。

日本での経験を生かして、少しでも多くの人役に立つことが、私の出来る最大の恩返しだと思います。

中村学園大学の教員、教授の方々、私を受け入れて頂きありがとうございます。素晴らしい経験をし、勉強の丁寧なご指導をしていただいたお陰で、日本の高度な知恵と技術を得ることが出来ました。

このような貴重な機会を与えてくださった福岡県庁、福岡県国際交流センター、福岡県海外移住者家族会、パラグアイ福岡県人会、保証人の佐々木なおみ様、山崎みつき様には大変お世話になりました。伝えきれない感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



中村学園大学栄養科学部栄養科学科
教授 大部 正代
(山崎指導教員)

パラグアイ共和国の栄養士の教育制度や卒業後の活動など、何も情報がない状況で山崎 亜希さんを研修生として1年間受け入れました。大学の環境に慣れていただくことを最優先とし、栄養科学部1年～4年までのカリキュラムから、興味がある、もしくは学びたい授業を選択していただき受講してもらいました。

調理実習に関しては基礎調理（和食・中華・フレンチ）並びに応用調理、さらに治療食、ライフステージ別の食支援の方法と調理の実際などを通して、日本における食を中心とした栄養管理の現状を学んでいただきました。さらに英語の授業では、亜希さんのアクティブな授業態度に、他の学生も刺激されて、毎回楽しい授業ができましたと、担当の先生から報告を受けております。

日系社会では当たり前、自家製の豆腐、納豆、味噌、醤油などは、多種多用の商品がスーパーには、所狭しと並んでいます。日本では趣味やこだわりとして味噌を作る人はいますが、調味料はほとんど購入します。日本の食材がパラグアイの日系社会の食材とかなり違うのにカルチャーショックを起こしたと推察します。

授業のほかにも、ゼミの活動にも参加してもらいました。私の13名のゼミ生とともに甘酒スムージーの商品化やドック受診者の食調査などにも参加し、日本の管理栄養士コースの現状を様々な角度から学んでいただきました。休むこともなくゼミ生とともに熱心に勉強していました。

パラグアイでは、クリニックに勤務されていたので、市内のクリニックの栄養指導を5月から週1回見学していただき、2017年2月13日から2週間、公立学校共済組合九州中央病院（400床）にて、臨地実習を経験し、入院患者の栄養管理を学んでいただきました。急性期の病院で最先端の医療環境で学べたことは、帰国されてからの業務の参考になると考えます。大学の栄養クリニックの生活習慣病予防のための料理教室では、スタッフの一員として大いに活躍していただきました。調理の腕と要領は、かなり良いと思います。帰国後は、素材を生かしたパラグアイの日系の方々向けにバランスの良い食事の作り方などを教え、健康寿命の延伸に寄与していただきたい。この1年大学だけでなく多くのことを学ばれたと思います。帰国後は、パラグアイの栄養改善、生活習慣病の予防に貢献されることに期待します。



ペルー福岡クラブ

松藤 福田 カルロス アウグスト

九州造形短期大学 造形芸術学科

最初に

私は松藤カルロスです。2人兄弟の1番目です。日系四世で三十歳です。私はペルー福岡クラブにいました。私はペルーで産業デザインの会社で仕事をしていました、でも絵をかくのが好きでしたから、ずっとイラストレーターになりたいと思っていました。それで、イラストレーションの仕事をしました。そのあと、ペルーの専門学校でイラストレーションを教えました。しかし、ペルーのイラストレーションはまだまだ発展途上にあつたので、私はどこか他の国で勉強したいと思いました。でもどこで勉強していいかわかりませんでした。すると、ペルー福岡クラブが日本へ行くチャンスを与えてくれました。

勉強のこと

去年の4月から九州造形短期大学に行きめました、私はたくさんのことを学びました。とてもいい経験でした。とくに、マンガの勉強がいい経験でした。

子供の時から私はマンガを勉強したかったが、ペルーではマンガの学校がありません。ようやく、去年その夢が叶いました。

日本に来てから私はマンガをどんどん書きました。大学の先生からのすすめもあって、去年の10月にマンガのコンテストにしました。10月はマンガをかきけました。とてもハードな毎日でしたが、とてもいい気分でした。それでも私は満足まだじゃありませんでしたから、も、新しいマンガを描いています。テーマは haunted painting です。コンテストに応募したマンガは決められたストーリーでした。私はストーリーに合わせて絵を書きました。ですが、この haunted painting はストーリーもえも自分のオリジナルですから、とても楽しいです。

マンガのプロセスを学びました。まず、キャラクターのデザインをして、マンガのレイアウトのネームをかきます。マンガのコマを決めます。ネームのチェックは日本語の先生していただきました。それから、インクでマンガをかきます。マンガをスキャンしてパソコンでマンガのセリフを間変えます。最後にスクリーントーンをはって、プリントします。

キャラクターデザインの勉強は、とてもおもしろいです。絵をかくだけじゃなくて、キ

キャラクターのパーソナリティも考えます。花のキャラクターとドラゴンもデザインしました、今は学生が自分の妖怪を作っています。このテーマはとても面白いとおもいます。

デジタルイラストレーションと日本画の授業もありました。日本での大学の授業は少しずつすすむので、私にとってはとてもよかったです。たくさん練習して、たくさん絵をかきます。おかげで私の絵はよりよくなりました。ペルーに帰ったら、私はこのことをみんなに教えたいです。

大学でテレビゲームの会社のセミナーに行きました。会社はフロムソフトウェア (FROM SOFTWARE) です。私はフロムソフトウェアのゲームが好きですが、とても難しいです。セミナーはとてもおもしろかったです。アニメーションの会社のセミナーにも行きました、その会社は私の一番好きなマンガのアニメを作っていました。その経験は凄かったです。

私は日本語を勉強しています、はじめは日本語をとて難しいと思いました。しかし、少しずつ日本語をおぼえました。私は去年の12月4日に日本語の試験のN5を受験しました。試験は少し難しかったと思います。時間が短かったです、がんばりました。試験の結果は今年の2月にわかります。日本語の先生たちにもとても感謝しています。私はペルーへ帰っても、日本語の勉強をつづけたいと思っています。

経験

去年いろいろなところへ行きました。

夏休みに静岡で富士山にのぼりました。はじめて新幹線に乗りました。富士山に8時間ぐらいかけて登りました。道は長くて、難しかったです。富士山の山頂は、とても寒かったです、きれいでした。日の出を見ました。

それから、大阪にUSJに行きました。楽しかったですが、その日はすごく暑かったです。人が一杯でした。ジュラシック・パークとハリー・ポッターにはいりました。私の一番好きな乗り物は、後ろにすすむハリウッド・ドリームバック・ドロップです。

それから奈良と京都へいきました、きれいなところだとおもいます。

11月にペルーの友達と東京へ行きました。私たちは渋谷駅の近くに泊まりました。とても便利でした。秋葉原にも行きました。私はマンガが好きですからとても楽しかったです。新宿と浅草と銀座にも行きました。

最後に

去年は素晴らしかったです。いろいろな国の友達をつくって、旅行して、新しい経験をしました。家族会と福岡県国際交流センターの方々のおかげです。田植えをして、着物を着て、茶道をして、もちをつくりました。自分のルーツ、日本、日本語、日本文化も学びました。

大学は面白かったです、8年前にペルーで大学を卒業しましたから、今回、久しぶりに勉強して、うれしかったです。

私は、福岡県国際交流センターのみなさんに心から感謝しています。



九州造形短期大学造形芸術学科
講師 森下慎也
(松藤指導教員)

私が松藤氏と会ってから約1年を振り返ると、彼の積極的に課題に挑戦する姿が強く印象に残っています。日本のマンガやイラストレーションを好み、そのテイストを自分のものにするために、マンガの授業にとどまらず、企業関係者からのアドバイスを受けるといった努力は、他の学生の刺激にもなりました。主な指導担当者は、マンガの授業担当者である渋谷先生、浜田先生ですが、そのやる気のある学びの姿勢に、感心されていました。だからこそ、松藤氏のこれからの活躍を期待し、あえて厳しいアドバイスをするならば、日本独特のマンガの表現や考え方を理解するにはかなり時間を要し、また、それに見合う理解はまだまだ深めていく必要があります。松藤氏の作品は表面的な日本風のイラストを描くことはできるが、大事な中身の考察が不十分であることは否めないです。つまり、日本独特の高度に成熟したサブカルチャーは、日本の歴史、生活習慣など様々な文化背景に基づく時間の経過の産物です。当然、作品制作にはコミュニケーションが重要で、日常会話ではなく、マンガを生み出す独特なニュアンスやテンポでの雑談ができるレベルが重要な要素になります。また、日本人は多様性を受け入れ、育む性格をしています。我々が松藤氏に期待し求めているものは、日本人が描けるイラストやマンガではなく、ペルーのアイデンティティーに基づいた、松藤氏だからできる独自の表現の作品だと思います。

松藤氏の爆発的な行動力や高度な技術力が、ペルーのオリジナルマンガやイラストを生むきっかけになり、日本人を魅了する作品が生まれることを期待してエールとしたいと思います。



在ボリビア福岡県人会

八田 生香

福岡医療専門学校 柔道整復科/鍼灸科

はじめに

私はボリビア出身の日系三世です。この度私は多くの方の協力や支えによりお蔭様で無事に研修を終えることができました。

ボリビアでは理学療法士として働いていましたが自分の知識に限界を感じていて福岡で再学習するチャンスがあったので留学を決意しました。

柔道整復を学ぼうと思ったのは母国で実施しているリハビリのやり方が日本の柔道整復士の分野に近いと知り興味を持ったことがきっかけです。また鍼灸に関しましてもリハビリをする上で有効な代替療法であり、とても万能な施術と把握していたのでこの機械に習得したいと思っていました。

日本での生活

4月からの研修生活は最初は戸惑いながらも、休みの日には学校へ行くよりも早く起きて遠出したり、近場を自転車で散策したりしました。また家族会の皆さんのおかげ色々な形で日本を知ることができました。母国には無い床で寝る習慣、効力のある温泉、特等席で見る夜空いっぱい咲く花火、どれをとっても素晴らしい体験でした。

その中でも一番心に焼き付いてる体験は田植えです。私は代々農家の家系に生まれ育ちましたが、家業の農作業には重機や大勢の従業員を取り入れられるので正直自分は一度も携わった事はありません。

私にとって農業とは一番身近にあって一番遠い存在のようなものだったのでまさか日本で田植えを体験するとは思っていませんでした。田植えから始まり、稲刈り、脱穀を体験し、父の仕事の大変さについて身をもって実感しました。

日本での生活はとても便利すぎて帰国後のことが心配になります。時間に正確なところ、マナー、習慣、人間性全てにおいてボリビア人には欠けている物ばかりです。おもてなしの心や他人に対しての気遣いがどこにいても誰にでもできるそういった日本人の良いところを日系人として大切にしていきたいと思います。

困ったことと言えば人との距離のとり方です。

「一を聞いて十を知る」と言うことわざの通り日本人は言外を察する能力がとても優れて

います。一方で外国生まれの私は、いわゆる「なんでも発言する」背景には「全部言わないと伝わらない」という感覚があります。この発信が得意な文化と、受信が得意な文化の違いにどこまで踏み込んでいい物なのかとても悩みました。

一定の距離を保ちつつ様子を伺っては見たけれどなかなか壁を越えることが難しく感じました。だから尚更たまに出会う無条件で受け入れてくれる人や、国際交流に興味を持ってくれている人達は貴重な存在で私は『ここに居て良いんだな』と思わせてくれ安心しました。

学校・勉強

私はどちらかと言うと日本語は得意分野だと思ってました。幼いころから日本のテレビで育ち日本の小説、漫画を読み母国語のはずのスペイン語より使っていた言語です。

しかしやはり日本語が少しばかり達者であったとしても授業について行くとなるとこれがまた一苦勞。先生の話に耳を傾け、メモを取り、板書を写すという誰にでも出来るこの単純な作業が、私の足りない日本語の能力のため授業が終わった頃には力を使い果たしたかのような感覚を受けました。これは、ある意味自分を見つめ直す良い機会になりました。

それでも数週間後には少しずつ慣れてきてスムーズにこなせる様になってきました。先生次第でもありますが教科書どおりに進んでくれる講義は比較的について行きやすく聞いてて理解するのに困らなかつたです。

実技の授業ではテーピングや包帯の巻き方などを教えていただきました。学生時代に一度は習ったことはありましたが実践した回数は少なく、記憶が上書き保存され忘れかけていたことが沢山ある事に気づかされました。

もう一度学生に戻り一から勉強し直す事は山ほどありスペイン語だとわかっているつもりでも日本語で訳すると全然違ったり、解剖学や筋肉の名前は難しく一年生の子に教えてもらうことは多々ありました。

先生たちの指導のもと、自分にとっての復習だったり新しいことだったり勉強させていただきました。

鍼灸に関しても元から興味はあったものの、針を刺すのも刺されるのも怖い、勇気たらずのそんな私が鍼灸科の授業も受ける機会をいただきました。最初は練習台の上に、次は自分に、そして他人にと順序を追って実技の内容はさらにレベルを上げていき四肢から始まり腰や背中へと部位をステップアップしていきます。

私の下手くそな痛い針を患者役の人に打ってしまった時もあるれば、じわ〜っと熱いお灸をすえられたりしたこともあります。しかし感想やアドバイス、指摘など受けられるのは学生である特権であって、臨床の場に立つと誰も教えてはくれないよ、と言う先生の言葉を痛感しました。

なんど刺しても刺さらない針だって無駄なことなんて一つもないと私はしみじみ思いました。

最後に

親元離れ沢山の人達に会い助けられ、どれだけ恵まれた環境に居たのかを気づかされました。私にとってこの研修は自分自身を見つめ直し、成長できたと思います。

日本文化に触れるたくさんの機会を与えてくれた家族会の行事は私の中の日本人である想いにさらに磨きをかけてくれました。

感謝の言葉だけじゃ足りないくらいの経験をできたことが県費留学生として研修に来ることの魅力の一つだと思います。

長いようで短い時間の中で沢山の人と出会い、助けられ、とてもいい絆を築くことができました。また私も誰かのために手を差し伸べる事があれば、この感謝の気持ちをお返しすることがきっとできる事でしょう。

このような貴重な経験をする事ができたのも福岡県庁、福岡県国際交流センター、在ポリビア福岡県人会、家族会そして保証人を引き受けてくださった安松様、本当にありがとうございました。心から感謝いたします。





福岡医療専門学校 柔道整復科
学科長 喜多村 伸明
(八田指導教員)

八田生香さんは、平成 28 年 4 月から福岡医療専門学校の柔道整復科に所属されました。その中で、柔道整復総論、柔道整復各論、柔道整復実技、臨床実習および柔道等の講義の受講に加えて、鍼灸科の東洋医学概論や鍼灸実技、看護科のリンパ浮腫治療など多数の講義及び実習科目を受講されました。

八田さんは、ボリビアで理学療法士としてクリニックに勤務されていました。主な患者さんは、日常生活の中で身体の痛みを訴える人たちばかりで、その治療法としては、物理療法や電気療法などが主流だったようです。

以前、日本の急性期病院で研修を受けたときに知り合った理学療法士の方に、ボリビアで行っているやり方は、日本では柔道整復師にあたりと指摘されたことがきっかけとなって、日本の伝統医療である柔道整復術を学びに来られました。

研究の目的は、「痛み」に対する対応能力の向上でした。日本の様々な治療法を学び、将来は母国の高齢者の方などのリハビリに役立てたいとのことでした。

そこで、本校が柔道整復科・鍼灸科・理学療法科・診療放射線科・看護科の 5 学科を有していることから、八田さんの希望を聞きながら、柔道整復科だけではなく鍼灸科などの講義も加えたカリキュラムを作成しました。

八田さんは、入学当初から日本語は堪能でしたが、教科書の専門用語や筋肉の名前、鍼灸では難解な漢字が出てくることもあり、漢字に戸惑ったりしながらも必死に講師の話に耳を傾け、懸命に勉強されている姿から感銘を受けました。実技の授業ではテーピングや包帯の巻き方など、理学療法士として良い復習になったようです。また、鍼灸やリンパ浮腫治療など新たな治療法も学ばれることができたのではないかと思います。各クラスの生徒とも仲良くなり、心配していた柔道の授業も積極的に参加するなど意欲的に取り組みました。

日本において様々なことを学ばれたこの一年間は、八田生香さんの将来にとって意義あるものになったと感じています。帰国後、ますますのご活躍とご多幸をお祈りしています。